

「セシウム 137」子どもの心臓に重大な影響！ ～ チェルノブイリ研究者からの教訓を生かせ！ ～

チェルノブイリ原発事故で放射能被害が深刻だったベラルーシ共和国の中にゴメリ州という地域がある。そこで放射能による内部被曝の影響を長年調査してきたユリー・バンダジェフスキー博士（ゴメリ医大元学長）の『**人体に入った放射性セシウムの医学的生物学的影響—チェルノブイリの教訓**』という本が、福島第1原発事故を受けて日本語訳で自费出版されたようだ。内容の概要がネット上で紹介されていた。重要な警告がされている。

欧州放射線リスク委員会のクリストファー・バズビー氏の話より

・・・略・・・しかし、私たちは、チェルノブイリで、放射線があらゆる種類の病気の原因になっているのを知っており、**その中のひとつが“心臓病”**です。私の同僚、ユリー・バンダジェフスキー、彼は、“ベラルーシにおけるチェルノブイリのセシウム 137 の子供への影響”の研究”で有名ですが、**90年代後半に、セシウム 137 で、わずか 20～30 ベクレル/kg の放射線の影響を受けた子供たちの心臓に、不整脈が起こっていることを発見しました。**

二つの重要なことがいえます。これは大変、重要なことです。

まず、最初に、**福島原発の放射線の影響を受けている地域の子供たちは、心電図の検査の必要がある、**ということ。すべての病院が、この心電図の計測機器を持っています。この検査を行えば、心電図にその伝動の問題が表れるでしょう。これは、バンダジェフスキー氏が偶然、発見した方法です。

バンダジェフスキー博士の研究成果の概要

* 量が多いので神が抜粋しました。

- * **セシウム 137 の体内における慢性被曝により、細胞の発育と活力プロセスがゆがめられ、体内器官(心臓、肝臓、腎臓)の不調の原因になる。**大抵いくつかの器官が同時に放射線の毒作用を受け、代謝機能不全を引き起こす。
- * **セシウムは男性により多く取り込まれやすく、女性より男性により強い影響が出ており、より多くのガン、心臓血管不調、寿命の低下が見られる。**
- * **細胞増殖が無視できるかまったくない器官や組織(心筋)は、最大範囲の損傷を受ける。**代謝プロセスや膜細胞組織に大きな影響が生じる。**生命維持に必要な多くの系で乱れが生じるが、その最初は心臓血管系である。**
- * **セシウムの平均蓄積量 30.32±0.66Bq/kgにあるゴメリの三歳から七歳の子供は蓄積量と心電図に比例関係があった。**
- * **チェルノブイリ事故後のゴメリ州住民の突然死の 99%に心筋不調があった。**持続性の心臓血管病では、心臓域のセシウム 137 の濃度は高く、136±33.1Bq/kgとなっていた。
- * **ミンスクの子供は 20Bq/kg 以上のセシウム 137 濃度を持ち、85%が心電図に病理変化を記録している。**
- * **ミンスクの子供で、まれに体内放射能が認められない場合もあるが、その 25%に心電図変化がある。このように濃度が低くても、心筋に重大な代謝変化を起こすのに十分である。**
- * **平均 40-60Bq/kg のセシウムは、心筋の微細な構造変化をもたらすことができ、全細胞の 10-40%が代謝不全となり、規則的収縮ができなくなる。**
- * **900-1000Bq/kg のセシウム蓄積は 40%以上の動物の死を招いた。**
- * **血管系が侵され、高血圧が幼児期からも見られることがある。また 15 キュリー/km² の汚染地の子供の 41.6%に高血圧の症状が見られた。**

- * **セシウムは血管壁の抗血栓活性を減退させる。**
- * **セシウムは胎児の肝臓病を引き起こし、その場合胎児は肝臓に限らず、全身の代謝の乱れが生じる。**
- * **免疫系の損傷により、汚染地ではウイルス性肝炎が増大し、肝臓の機能不全と肝臓ガンの原因となっている。**
- * **セシウムは免疫の低下をもたらす、結核、ウイルス性肝炎、急性呼吸器病などの感染症の増加につながっている。免疫系の障害が、体内放射能に起因することは、中性白血球の食作用能力の減退で証明されている。**
- * **体内のセシウム濃度が増すとコルチゾールのレベルも高まり、胎児が子宮内で病気になるやすい。**
- * **セシウムは女性の生殖系の内分泌系機能の乱れをもたらす、不妊の重要因子となりえる。また、妊婦と胎児両方でホルモンの不調の原因となる。**
- * **妊娠すると母体内にセシウム 137 は顕著に蓄積する。**実験動物では、着床前の胎児死亡の増加、骨格系形成の不調、管骨の成長遅れと形成不全が現れた。
- * **セシウム 137 は基本的に胎盤に蓄積するものの、胎児の体内には入らないが、母乳を通じ、母親から子供に汚染は移行する**（母乳をあげることで母親の体の汚染は低減される）。多くの系がこの時期に作られるので、**子供の体に悪影響を与える。**
- * **体内放射能レベルの高い子供（ベトカ郡、15—40 キュリー/km²）では、視覚器官の病気、特に角膜の病状を伴う眼レンズの変化の頻度が高い。また体内のセシウム 137 と白内障発生率の間に正比例関係が明確に見られた。**
- * **子供の体内にセシウムが(19.70±0.90Bq/kg)が長期入ると慢性胃腸病を起こし、自立反応のハイパーシンパチコトニー変化に現れる。**
- * **汚染地帯、非汚染地帯の双方で、わずかな量の体内セシウムであっても、心臓、肝臓、腎臓をはじめとする生命維持に必要な器官への毒性効果が見られる。**
- * **セシウムの影響は、ニコチン、アルコール、ハイポダイナミアと相乗して憎悪される。**
- * **1976年と1995年のベラルーシの比較。悪性の腎臓腫瘍が男4倍以上、女2.8倍以上。悪性膀胱腫瘍が男2倍以上、女1.9倍以上。悪性甲状腺腫瘍が男3.4倍以上、女5.6倍以上。悪性結腸腫瘍は男女とも2.1倍以上。**
- * **ゴメリ州では腎臓ガンは男5倍、女3.76倍。甲状腺ガンは男5倍、女10倍となった。**
- * **1998年のゴメリ州での死亡率は14%に達したが、出生率は9%（発育不全と先天的障害者含む）だった。妊娠初期における胎児の死亡率がかなり高かった。**
- * **セシウム汚染地の住民の先天的進化欠損が毎年増大している。ここでは多因子欠損が第一位である。**
- * **しかし、セシウムが人体に入るのを防ぐほうが、セシウムを排出したり、乱れた代謝を正常にするより容易なことを心に留めるべきである。**

ここに記載した内部被曝影響は一部にしかすぎない。博士は放射線生物学でノーベル賞を受賞ほどの人物だが、この研究成果を発表したが故に時の政府により別件逮捕されるという憂き目にあっている。

日本の食品の暫定基準は、米などで500Bq/kg、野菜類で2000Bq/kgとなっている。バンダジェフスキー博士の研究では**40～60Bq/kgの内部被曝で心臓の収縮機能に異常が見られる結果**が得られている。日本の基準は異常ともいえるほど高い。こうした環境下で子どもたちが生活を続けていけば、不整脈の症状が多発してくる恐れがある。突然死を防ぐためにも、子どもの不整脈の状態を確認していくことが重要だ。

既に原発作業員の中から急性白血病や急性心不全で亡くなった方が出ているが、東電は死因と原発作業との因果関係を一切否定している。子どもたちが急性心不全で突然死しても、今の情勢では放射能による内部被曝との因果関係は否定されるだろう。福島第1原発事故の住民避難体制は旧ソビエト体制よりひどい。今の日本では、残念ながら自己防衛をせざるを得ない状況だ。不整脈などの兆候があった場合は直ちに疎開が必要だとバズビー氏は警告している。心電図などのデータを知ることは突然死の予防につながる。髪の毛などの体組織の保管はまさかの際に賠償請求をする重要な資料になる。